

ニューヘアスタイルグッズ

水沼健

女 2 女 1 男 3 男 2 男 1

夏、海の近く

顔

(わたしのあのあたりの髪はますます伸びなくなった。しかしこの伸びなくなったことに気づくということは、意外にむずかしい。もともと髪というのは伸びているのに気づくのだってむずかしいものだし、それがさらに伸びてないとなると、さらにむずかしいことになる。これは最後の瞬間についての話だ。だが最後の瞬間とはどういうことかはここでは説明しない。いや説明しよう。つまりこういうことだ。伸びるはずのものが伸びていないということに気づくには時間がかかるし、気づいても気づかなかつたふりもある程度まではできる。たとえば、いまの鏡を見たことはなしにしようとか。わたしがよくそうするように。そして気づかなかつたふりをもうできないということろまできて、はじめて気づくということになる。それがわたしのいう、気づくという意味だ。そして気づいた時にはもうどうすることもできない、というのが最後の瞬間という意味だ。わたしはこのたびついにそれに気づくことにした。つまりわたしの髪が伸びなくなったということにだ。)

男1 にわとりが調子が悪いんです。

女1 そうですか。

男1 雄のほうです。

女1 そうですか。

男1 あとうさぎも調子悪いのがある。

女1 またですか。

男1 また？

女1 うさぎはこのあいだ一匹死んだんじゃないかったですか？

男1 あ、そうでした。あいつ死にましたね。死にました。調子悪かったのは死ぬ前です。

女1 それはそうでしょうね。

男1 これも雄のほうです、死んだのは。いや雌のほうです。うん。いや雄のほうです。ええ。雄はどんな動物でも弱いのです。

女1 そうですか。

男1 それに力強い。

女1 どっちですか？

男1 力は強いんです。なので体は強くない。

女1 なので？

男1 ええ。

女1 なんていう名前だったんですか？

男1 名前？

女1 死んだうさぎの。

男1 名前ですか。ありませんよ。

女1 なかったんですか？

男1 動物はどれも似たようなものなんで、いちいち名前つけても意味がないんですよ。

女1 そうでしょうか？

男1 ちがいがわからないでしょう。ちがいがわからないんです。

女1 そうですか。

男1 そういつてました。

女1 誰が？

男1 うちの、母です。

女1 そうなんですか。

顔 (うさぎの話はやめよう。それよりもナポレオンの話をした方がよさそうだ。私はいま本を読んでいる。もちろんフランスの将軍、ナポレオンの伝記だ。その本の最初のページにはナポレオンの挿絵がある。ナポレオンは白い馬に乗り、奇妙な形の帽子をかぶっている。馬はナポレオンの体の重たさに耐えられなくなったため、振り落とそうとしている。それをナポレオンは踏ん張って耐えている。人と馬の戦いの瞬間が描かれている挿絵だと教えてもらった。ナポレオンの奇妙な帽子の下からふさふさの髪がはみでてるのがわかる。だが髪の毛の話は今はやめよう。いま読んでいるのはナポレオンが生まれ育った島を出

たところで、ほんの初めの部分だ。島で生まれ島で育ったところはわたしとナポレオンの共通したところだが、ナポレオンは七頁目で島を出た。あとたっぷり二百頁もあるというのに。一方、わたしはずっと島に住み髪の毛も伸びなくなる年まで、なにもしなかった。何頁目かもわからない。)

男1 それにしても、ここはいいでしょう？

女1 そうですね。

男1 最高の場所ですよ。まあ最高というほどじゃないですけど。

女1 うんまあ、はい。橋がよく見えますね。

男1 そうなんです、橋を見るにはここは最高です。立派なもんでしょう？橋を渡ったことはありますか？

女1 ありません。

男1 そうですか。ここは、わたしの好きどころなんです。静か

だし。風も強くない。

女1 風？

男1 あまり強い風はよくないんです。特に髪に。

女1 髪？

男1 うん、髪を傷めてしまうんですよ。

女1 そうですか。

男1 先生も気をつけた方がいい。潮風は髪をだめにしてしまします。だからここは好きなんです。風が強くないし、波も静かだ

し。他のところはこうはいかない。

女1 はい。

男1 しかも今日は特に風が強くない。

女1 そうですかね。

男1 まあ、髪の話は、ええ。やはり今夜は最高ですね。

女1 用務員さん。

男1 はい。

女1 もう終わりですかね？

男1 祭りですか？終わりかな？祭りはもう終わりだと思います

よ、祭りは。

女1 祭りはって？

男1 いや、別にまあ。

女1 それではもう帰ってもいいんですか？

男1 帰ってもいいでしょうね。

女1 ではわたしは帰ります。

男1 そうですか。

女1 用務員さんはどうしますか？

男1 そうですね。どうしますかね。

顔 (そんなふうにしてにわたしたちは何もしなかった。)

男1 ところでここは昔、泳ぐところでした。いまはもう禁止にな

っていますけど。

女1 そうなんですか。

男1 先生は海で泳ぐのは好きですか？

女1 泳いだことありません。

男1 そうですか。

女1 すいません。

男1 いえいえ、まあおもしろくはないですからね。海で泳いだと

ころで。

女1 あ、でも泳いだことはありません。

男1 そうですか。プールのほうが安全でいいです。

女1 いえ、プールでも泳いだことないんです。

男1 じゃあ、どこで？

女1 いえ、すいません泳いだことありませんでした。

男1 泳ぎは嫌いですか？

女1 どうでしょう。でも、水着は持っています。

男1 はあ。

女1 嫌いじゃないと思います。

男1 そうですか。でもここはいいでしょう？泳ぐことはできませ

んが。

女1 そうですね。

男1 気に入りましたか？気に入ったらお気に入りに入れてくだ

さい。

女1 はい。じゃあ、まあ気に入りましたら。

顔 (スカートに砂がついている。払ってあげるといい。しかしそうするとおしりを触ってしまう。)

女1 用務員さんは泳げるんですか？

男1 もちろんです。最近はあるのですが、子供のころは毎日夏になると泳いでましたよ。それくらいしかやることないですから。

女1 そうですか。

男1 ここは昔、泳ぐところでした。

女1 それはさつき、はい。

男1 子供たちがたくさん集まって朝から泳いでました。あれなんだと思いますか？飛び込み台だったんですよ。今は潮があればすけど、満ち潮になったら十分な深さになるから飛び込めるんです。

女1 そんなに来るんですか、海は。

男1 来ますよ、もっと後ろの方まで満ちてきますよ。しかしあのときはまだ満ちてなかったんですね。

女1 え？

男1 馬鹿がいましたね、まだぜんぜん満ちてない時に飛び込みまして、そのまま海に突き刺さって死にました。

女1 海に突き刺さった？

男1 まあ海というか、砂に。しばらく逆さに突き刺さって、潮と

ともに流されて行って行方知らずになりました。

女1 え、誰も気づかなかったんですか？

男1 そうですね。わたし以外はだれも。

女1 なにもしなかったんですか？

男1 なにもしませんでした。即死だったんです。あれはどうしようもなかったと母も言っていました。

女1 おかあさんも見てたんですね。

男1 はい。そういえば、もしかしたら弟もいたかもしれません。あれ以来、ここは泳げなくなりました。

女1 そうですか。

男1 まあ海で泳いでもあまりおもしろくはないですからね。おかしいな。

女1 え？

男1 わたしがここをどんなに好きかという話をしようと思ったのにどうしてこんな話になったのか。

女1 用務員さん。

男1 はい。

女1 帰ります。

男1 そうですか。

顔 (そんなふうにはわたしたちは何もしなかった。ふたりで海のそばに座って、夏の祭りの終わりがけた夜、海からの弱い風に吹

かれながらなにもしなかった。たぐさんの太鼓の音がまだ遠くから聞こえていた。たぐさんの人がそれにあわせて声を上げ、島の東西を代表するふたつの神輿のどちらかを応援していた。多くの人たちは、神輿の戦いが終わった後、ふたりきりになり残った酒を飲みながら、していた。家に帰り暗い部屋でしていた。暗い草むらで立ったままで、あるいは車の中でシートを倒し横になって、していた。しかしわたしたちはなにもしなかった。初めて用務員室の奥のわたしの部屋に二人で入った夜、ベッドに二人で横に並んで座って、なにもしなかった。先生の家までもうすぐというところの坂の上で、二人で立ったまま何時間もふくろうの声を聞きながら、なにもしなかった。そしてあのときも何もしなかった。人気がない放課後の暗い音楽室で、先生がこっそり雨にぬれた服を脱いで着替えていて、わたしの見たいと思っているいろいろがすっかり見えていた時。これは初めて話す話だ。先生は気づいてなかっただろうが、わたしはそのいろいろを見ていた。ピアノの陰で、コントラバスのふりをして。わたしはコントラバスに似ている。もちろん横幅だけだが。しかし暗かったのでそれで十分だった。問題があるとしたら、わたしの学校にはコントラバスがなかったことだ。わたしは学校で初めてのコントラバスになったのだ。あのときほどわたしは他の何かに似ていたことはない。にもかかわらず、い

やコントラバスだからこそなにもしなかった。コントラバスであることに懸命になりすぎて本来の目的を忘れてしまったのだ。あれらが見えていたにもかかわらず。なにもしなかった。もちろんわたしはしたことがまったくないわけじゃない。したことはある。ただしひとりで。その夜も帰ってしたくらいだ。しかしふたりでは、まだない。だからしたことがあるというわけじゃない。

顔
（帰り道に犬がいる。なぜかあの男に似ている気がする。というかあの男は犬に似ていた。よく犬のようになるときどき、クンクンと鼻を鳴らしてなにかを探すようなしぐさをしていた。だからその犬が特にあの男に似ていたというわけではなく、あの男のほうが犬というものの種族的な特徴を兼ねそなえていたのかもしれない。そう思うと途端にその犬に対する興味がなくなっていたが、なんとなくついてきたのでそのまま家まで一緒に帰ることになる。）

顔
（ひとりになり、そのまま海を見ていた。海を見ていることと何もしないことはちがう。なにがちがうかはわからないが。どれくらい座っていたのだろうか？今日は少しばかり酒を飲んだせいか、頭がジンジンすると思ったら、それは酒のせいではなくて、男がわたしの頭をさつきから叩いていたためだった。）

男1 おい。

男2 うん？
男1 やめる。
男2 なにをだ？
男1 それをだ。
男2 わかった。
男1 酒を飲んでるな。
男2 飲んでる。酒の味は二十歳ごろ覚えた。
男1 普通だな。
男2 普通だ。おれは普通の男。フツオ。もう帰るのか？
男1 もうすぐ帰る。
男2 用務員室にか？
男1 用務員室じゃない。用務員室の奥のおれの部屋だ。
男2 ひと部屋しかないじゃないか。
男1 仕切りの板があるんだ。だからふた部屋だ。
男2 仕切りの板？
男1 そうだ。
男2 あれか？祝入学式って書いてあるやつか。
男1 そうだ。
男2 勝手に使っていないのか？
男1 いまは使っていないんだからいいんだ。
男2 たまには帰ってこい。フツオもさみしがっている。

男1 毎日会ってるだろ。
男2 ばああの部屋もきれいに片づけた。こっちはほんものふた部屋だ。帰ってこいヨシオ。ほら、このとおりフツオもさみしがっている。
男1 そうか。
男2 音楽の先生といっしょにいたな。
男1 見てたのか？
男2 まあ、見てた。おれたちは似ているところがあるな。
男1 兄弟だからな。
男2 そうだ。だけどそれだけじゃない、ほかにもある。
男1 ほかにもって？
男2 なんで音楽の先生といっしょにいた？
男1 おい、ほかにもってなんだ？
男2 なんでヨシオは音楽の先生といっしょにいた？
男1 当番だったからだ。
男2 当番ってなんだ？
男1 子供が怪我しないか監督する当番だ。祭りの間ずっと子供たちを見るのが仕事だ。
男2 じゃあ、朝からずっとふたりでいたのか？
男1 そうだよ。おい、ほかにもってなんだ。
男2 それよりナポレオンはどこまでいった？

男1 どこまでいったかな。

男2 ちゃんと読めよ。

男1 ちゃんと読んで。でもどうもどこまで読んだか分からんな
る。しばらく読んでから、ここまえに読んだなということがわ
かる。本を読むのは難しいな。

男2 挟んどけよ。なんか。

男1 うん。でも挟んだら読むとき邪魔になるだろう。

男2 ナポレオンはまだ島にいるのか？

男1 もう島にはいない。

男2 はやく読め。そしてナポレオンが何をしたかフツオに教える。

男1 教えたらどうするんだ？。

男2 おれは島を出るからな。

男1 でもずいぶん先の話だろう。

男2 そんな先じゃない。もうすぐだ。

男1 卒業まであと5年もあるじゃないか。

男2 そうなんだな。

男1 そのあと中学校もあるんだぞ。

男2 そうなんだな。

男1 いくのか？

男2 うん？

男1 中学だよ。

男2 考えている。ヨシオは出ないのか？

男1 うん？

男2 島をだよ。

男1 うん。出ない。

顔 (よくわからないだろうけどフツオの頭にはたんこぶが二つあ
る。校長室でたばこを吸って、校長先生に二回殴られたからだ。
しかしそのことは重要ではないのでもう触れない。フツオは春
から学校に通い始めた。小学校だ。今年で四五歳になるけれど、
いま小学一年生だ。フツオもわたしもずっと母の言いつけを守
ってこの年になるまで学校というものに行かなかったのだ。も
ともと母は学校なんかに通ったら本物の馬鹿になるといって、
わたしたちを学校に通わせなかったが、死ぬ間際になって突然
学校に行けといいだした。ちゃんと学校を卒業して、この島を
出て、大きく暮らしていけといいだした。わたしたちは塩をつ
くって、なんとか暮らしていたが、もうそれもだめだろう、せ
つかく橋もかかったんだからあれを渡って大きな暮らしをし
るといいだした。大きな暮らしというものがなんなのか分から
なかったので、大きな暮らしをした人の本を読むことにした。
そんなわけでわたしはナポレオンの伝記を読んでいる。そのあ
とわたしはフツオは学校に行った。そしてフツオは小学生にな
ったわけだが、わたしは間違って用務員になった。これでも学

校に行くということには変わりはないだろうと思って母に報告した。それを聞いて母はゆっくり死んでいった。享年七十八歳。）

男1 おい。

男2 うん？

男1 だからやめろ。

男2 なにをだ？

男1 それをだ。

男2 ちがったんだ。

男1 なにが？

男2 ばばあさ。ほんとは八十二歳だったんだ。

男1 そうなのか。

男2 知らなかっただろ。

男1 知らなかった。どおりでふけてると思った。

男2 そうだろう。おれもそう思ってた。

男1 なんで分かった？

男2 しかも、ばばあの野郎、もともと島の間でもなかったんだぜ。

男1 え、どういうことだい？

男2 見つけたんだ。

男1 なにを？

男2 それだけじゃないぜ、ばばあ学校を出てやがったんだ。

男1 え？

男2 卒業証書を見つけた。しかも高校のだ。

男1 そうか、どおりで頭がいいと思った。

男2 ばばあの野郎、学校なんか行くところくなもんならないとかいつて、あの野郎だけはきっちり行ってやがったんだよ。

男1 そうなのか。

男2 そこでフツオは考えたんだ。

男1 なにをだ？

男2 うん。そしてフツオはすることにしたんだ。

男1 だからなにをだ。

男2 うん。そしてフツオは実際にしたんだ。

男1 だからなにをしたんだ？

男2 おれはしたんだよ。

男1 おい。

男2 なんだ？

男1 おれはさつきからお前にいろいろ聞いてるのに、なんで答えない。

男2 え、答えてなかったか？

男1 答えてない。

男2 そうか。なにが聞きたい？

男1 だからお前なにをしたんだ？

男2 ああ、フツオはな、ばばあのいつてたことと反対のことをすることにしたんだ。

男1 反対？

男2 そうさ。どうにもばばあの野郎、フツオたちに嘘ばかり言ってたんじゃないかと思ったのさ。試しに枕を北向きにして寝たんだ。

男1 ほんとうか？

男2 でも大丈夫だった。なんともならなかった。飯を食った後すぐ横になったけどフツオは人間のままだった。

男1 それは、知ってる。

男2 お前もしたのか？

男1 したことがある。おれも人間のままだった。

男2 そうか。じゃああれはしたか。みみずだ。しよんべんかけた。でもちんぼはなんともならなかった。ばばあがずっと毒だから

あけるなど言っていた壺の中の物も食べた。おれはなんともない。いろいろやったが全然死んでない。わかるか、ヨシオ。不

死身なんだよおれは。

男1 おまえ、したな。

男2 した。

男1 したあとどうする？

男2 うん？

男1 じゃあ、おまえ学校やめるのか？

男2 うん？

男1 うん。ばばあのいつてたことと反対をやるんだろう？

男2 そうだな。

男1 どうするんだ？

男2 学校はやめない。楽しいからな。でもそれだと、ばばあの言いつけを守っていることになる。どうすればいいんだ？

男1 お前が考えろよ。

男2 たしかにそうだな。とりあえずおれは帰る。あしたも学校あるし。あしたは体育がある日だな。ドッジボールだ。

男1 ほどほどにしとけよ、フツオ。

男2 ほどほどにしてるよ。

男1 ボールを投げるんだぞ。子供を投げるんじゃないぞ。わかっているのか？

男2 わかっている。

男1 ほんとにわかっているのか？

男2 ほんとにわかっている。ちよつとまちがえただけじゃないか。ちゃんと赤白帽もかぶる。ゴムもあごのところで止める。子供

は投げない。校長室は煙草を吸うところではない。どうだ、わかっているだろ。

男1 ほかにもあるぞ。

男2 わかっている、おれはわかっているんだ。だからあんまりいうな。またわからなくなる。またわからなくなったらまたすることができなくなる。

男1 そうか。

男2 じゃあな。

男1 おい、ほかにもってなんだ？

顔 (ついできた犬はそのまま私の後に続いて家に入ろうとした。

そしてなぜか入れてしまった。家に入ったといっても部屋にあげるのは気がひけたので、玄関のところに座らせた。なにか食べるものを与えたら、出て行くかもしれないと思い、適当に用意して持っていったら、犬はもう静かに横たわって眠っていた。そんな風にしてその夜は、犬と一緒に過ごすことになった。朝になって目が覚めると、いつのまにか犬はわたしの布団に入っ
て寝ていた。夜に用意していた食べるものもきれいに食べていたようだった。犬を起こさないように気をつけながら、学校へ
出かけ、そして大怪我を負うことになった。休みの先生に代わ
って、その日の一年生の授業を受け持ったのがその原因だ。)

女1 すいません。

男2 え？

女1 わたしがボールをよけきれないばかりに。こんな大きな

ことになってしまった。

男2 いや、フツオが悪い。力いっぱい投げてしまった。

女1 そういうスポーツですから。

男2 まあそうなんだ。フツオが悪いとばかりは言えない。

女1 でも子どもたちはみんな体育をこわがっているようです。

男2 そうなんだ。仲良くやりたいものだ。

女1 そうですね。少し手加減したほうがいいかもしれませんね。

特に子供相手には。

男2 先生のいう通りだ。手加減しないと。

女1 いえいえ。今日はちゃんとルールを守ったわけですから。

男2 そうだ。難しいところだ。ルールを守ったからと言って問題
が起きないわけじゃない。

女1 まあ、はい。

男2 ルールに問題があるのかもしれないな。ルールに問題があると
すると、解決はさらに難しい。そもそもルールをだれが決めた
のかという話になる。それがわからないとルールを変えること
ができない。

女1 そんなこともないでしょう。

男2 ルールを変えられないとすると、ルールこそがスポーツだとい
うことになる。するとわれわれ人間はどこにいる？

女1 ああ、そろそろ授業に行かないといけないので。

男2 そうか。よし行け。

女1 あなたもでしょ。

男2 そうか。また続きを話さないとな。

女1 え、わたしとですか？

男2 もちろんだ。怪我のほうはどうだ？

女1 ああ、大丈夫です。だいぶ頭のほうもはつきりしてきましたから。

男2 ま、どんまい。

顔 (ドッジボールをしていた。強いボールが来て、顔にあたって、

地面に頭を打ってしまったというわけだ。そんな一日が終わり帰ってきたら、犬はまだ寝ていた。朝からほとんど動いた様子もないところなどは、ほんとうにあの男にそっくりだ。そんな事だろうと思って、食べるものを二人分買ってきていたので、寝ている犬の鼻先においてみたら、めんどくさそうに起き上がり食べ始めた。黙って食べてそのまま寝た。ますますあの男そっくりだと思って少しうれしくなった。寝て、起きて食べて、遅くまでラジオを聞いてわたしが起きたら寝ていて、わたしはその男を起こさないように静かに起きてラジオを消してでかけて、帰ってきたらやはりまだ寝ていた。そんな男だった。そしてときどき、壁に向かって小さく座り、クンクンと何か匂いをかいでいるようなしぐさをした。嗅覚と聴覚が異常に敏感な

ところがあって、その二つの感覚を使って、わたしの知らない領域のなにかと連絡を取っているように思えた。そのようなわたしの知らない領域から連れもどすため、わたしはあの男と歩きおろ散歩に連れて行つた。とくに嫌がる様子もなく、あの男は黙って散歩に出た。最後の時も、その時はそれが最後になるとは思わなかったが、そのように散歩をして帰った夜だった。そんなことを思い出していたらいつのまにか、その犬を散歩に連れ出していた。そしてそのまま道に迷ってしまった。ここはどこだろう？)

男1 あ、先生。

女1 あ、用務員さん。

男2 あ、先生。なんでこんなところへ？

女1 ここはどこですか？

男2 ここは便所道。

女1 え？

男2 ここは便所道。

女1 便所道？

男2 まちがって便所に落ちた人が通る道だから便所道。

女1 そうなんですか。

男2 落ちたのか？

女1 え？

男1 先生？

女1 いやいや。落ちてませんよ。落ちる人なんているんですか？

男1 たまにいます。

男2 便所に落ちた人は、恥ずかしいので生きていけないだろう。

だからこっそり島からでなくちやならない。便所から落ちた人が夜、こっそり通る道だから便所道。この先に便所浜というところがあって、そこから舟で島から離れる。そして新しいところに住む。でもやつぱり忘れたところにちがう名前になって島に帰ってくる。なじめないんだな、新しいところに。

男1 昔の話ですけどね。

女1 そうなんですか。

男2 昔の話じゃないぞ。田中さんいるだろ、田中さん。珍しい名前だろ。あれ昔便所に落ちたんだ、ばばあがいったからまちがいない。名前は変わってるけど、顔がかわってないからすぐわかるとわかってた。だからあいつ仕事ないだろ。みんな知ってるから仕事に就けないっていったぞ。

男1 誰がいったんだ？

男2 だからばばあだよ。

男1 おまえ、ばばあのこと信じないんじゃないのか？

男2 うん。ちがうな、昔の話だな。昔の話だよ先生。

女1 わかりました。

男1 大丈夫ですか、頭。

女1 もう大丈夫です。

男1 フツオは謝りましたか？

男2 謝った。

男1 すいませんといいましたか？

男2 それはいつてない。でもフツオが悪い。

男1 すいませんだ。

男2 そうだな。

男1 言え。

男2 なにを？

男1 すいませんだ。

男2 まあ、すいません。

男1 まあ、はいらない。

男2 そうだな。

男1 言え。

男2 なにをだ？

男1 だからすいませんだ。

女1 まあ、フツオ君が悪いわけではないですから。

男2 先生。

女1 はい？

男2 まあ、はいらない。

男1 お前だよ。

男2 そうだな。

女1 いやほんとに悪いのはわたしですから。

男1 いや、フツオが悪い。力いっぱい投げないようにいったじゃないか。

男2 それは聞いてない。おまえは子供を投げるなどいっただけだ。

女1 そういうスポーツですから。

男2 先生、なんでここに来た？

女1 え？ちよつと道に迷ってしまつて。用務員さんとフツオさんはどうしてこんなところを？

男2 おれたちの家がこの先にあるから。今日はひさしぶりにヨシオが帰ってくるので、もしよかつたら先生もうちに泊つていくと、ヨシオが喜ぶんじゃないかと思う。

男1 おいなにを言っているフツオ。

男2 食べるものはないので、ちよつどいい。

女1 これは食べるための物ではありません。

男1 それはなんですか？

女1 これは犬です。

男1 犬ですか？犬飼っていたんですか？

女1 飼っているわけではありません。ついてきたのです。

男1 野良犬ですか？

女1 そうです。

男2 先生のこと気に入っているようだな。

女1 そんなことありませんよ。

男2 ついてきたのだろう？

女1 はい。

男2 先生は気に入ってるのかな、その犬を。

女1 いや、どうでしょう。わかりません。

男2 あまり若い女の人が犬を飼うということは、よくない。

女1 え？

男2 この島は狭い。みんな見てる。悪いうわさになる。

女1 え、どういうことですか？

男2 な、ヨシオ。

男1 え、ああ、まあ。

女1 え、どういうことでしょうか？

男1 まあ、そういうところなんですよ。

女1 でも飼っているわけではないんです。ついてきただけなんです。

男2 それなら、なおさら悪いな。

女1 そうなんですか？

男2 そうだな、ヨシオ。

男1 まあ、そうかな。

顔 (そのようなわけで、その犬をもう二度と散歩に連れ出すことはやめた。道に迷うのもやめたい。便所にも落ちたくない。その犬は犬のくせに散歩が好きではないらしく、特に不満そうな気配も見せず、狭い部屋の中で静かに横になっていた。ある日、犬はわたしの家にあつた靴のにおいをクンクンと嗅いでいた。そこにはかつてのわたしたちの部屋にあの男が置いていったものが入っていた。いくつかの服、靴、わたしの物であるかあの男の物であるか分からない楽譜とレコード、ラジオ、歯ブラシ、それにメトロノームだった。メトロノームもわたしの物であるかあの男の物であるか分からない。一年以上も一緒に暮らしたというのに、あの男が残していったものはそれだけだった。)

顔 (その夜、ひさしぶりに家に戻ってきた。戻ったところで何もないので、そろそろ用務員室に戻ろうかと思つていたころ、家の呼び鈴が鳴つた。四十年ほど住んできたが、家に呼び鈴があつたなんて、そのときはじめて知つた。呼び鈴を押したのは黒い服を着たおばさんだった。)

女2 おばさんだ。

男2 そうだろうな。

女2 いやちがう。おばさんだ。

男2 なにがちがうんだ？

男1 わからん。

女2 お前たちの叔母さんだ。

男2 うん？

女2 わたしは姉さんの妹だ。

男1 誰だつてそうじゃないのかな。妹というものは。

女2 ちがう、だからわたしの姉さんはお前たちの母さんだ。

男2 ああ。

女2 わかつたか？

男2 わかつた。わかつたか？

男1 わかつたな。

女2 そうか。お前たちは頭がいいな。

男2 学校行つてるからな。

女2 わたしのことは覚えてないようだな。まだお前たちが小さい時に、ずいぶん遊んでやつたもんだが。覚えてないか？わたしの考えた遊びでおまえたち、楽しそうに遊んでたんだよ。

男1 知らない。

女2 そんなはずないだろう。あれは？パンチ&チョップは？覚えてないか、パンチ&チョップ。

男1 パンチ&チョップ？

女2 わたしの考えてやつた遊びだよ。おまえたちいつも喜んでたもんだが。

男1 どんな遊びだ？

女2 わたしがあんたたちにパンチするのさ。

男2 で？

女2 パンチに飽きたらチョップするのさ。

男2 誰が？

女2 わたしだよ。

男1 で、おれたちは？

女2 喜んでたよ。

男2 うれしくねえよ。

女2 そうかい、喜んでたけどねえ。おまえは特に頭叩かれるのが好きだったもんだけどねえ。

男1 うん？

女2 どうした、太いほう。思い出したか？

男1 いや、思い出したわけじゃないけど。おまえ、おれの頭叩くな。

男2 たしかにお前の頭をたたく気がする。

男1 なんで叩く？

男2 なんてかな？なんか叩かないといけない気持ちになるんだ。

男1 それ、パンチ&チョップ？

女2 ちがう。それはあれだよ、木魚だよ。

男2 木魚？

女2 覚えてくれてたのかい。そうだよ、おまえがおまえの頭を叩く係さ。

男1 え、そうだったのか。

女2 それでもうひとりがお経を読むんだよ。それが木魚さ。そういえば、もう一人いたな。あいつどうした？

男1 ああ。覚えてるのか？

女2 覚えてるよ。あいつどうした？

男1 死んだよ。

女2 そうか。なんか鼻たらしした頭の悪そうな子がいたが、そうか

死んだのか。長生きしそうなやつじゃなかったからな。まあお前たちが生きててよかったよ。いいのが生き残ったじゃないか。

男2 おい。

女2 うん？

男2 ワルオの悪口はやめろ。

女2 そんな怒ることないじゃないか。しかし姉さん死んだと聞いてびっくりした。

男1 誰に聞いた？

女2 誰だっていいじゃないか？

男2 教えろよ。

女2 わたしは何でも知ってるよ。この島のことはいちいち耳に入ってくるのさ。しかしこの島も相変わらずだな、懐かしいよ。

何ひとつ変わってないじゃないか。

男1 そうかな。

女2 わたしが子どもの頃のまんま。

男1 橋ができたよ。

女2 橋？そういえば橋があったな。

男1 それで港のほうがすっかり人がいなくなって、橋の近くにみ

んな住むようになったんだよ。学校もみんなあつちに移ったんだよ。

女2 そうだった、知ってるよ。この島もずいぶん変わったな。何

ひとつ懐かしくないよ。

男1 そうだろうね。

女2 それにしても、ずいぶん立派な橋ができたもんだな。

男2 ああ。

女2 あれさえあれば本州にも四国にもいつだって行けるじゃないか。

男1 ああ。

女2 いつごろできたんだい、あの橋は。

男2 わからない。

女2 おぼえてないのか。

男2 おぼえてないことはない。でもいつのまにかできてた。

女2 そんなことないだろう。

男2 ほんとだよ。いつのまにかできてた。

女2 そうかい。お前眠いのかい？

男2 は？なんでだよ。眠たくないよ。

女2 そうかい。

男2 ところでおばさん、なにしにきたんだ？祭り見にきたんなら、昨日終わったぜ。

女2 祭り？ああ祭りか。そのためにきたんじゃないよ。

男2 じゃあなにしにきたんだ？

女2 実家に帰ってくるのにいちいち理由なんてあるかい。まあ、姉さんが死んでおまえたちもいろいろ大変だろうと心配にな

って、様子を見にきてやったんじゃないか。おまえたち今何を

している？

男2 なんでも知ってるんじゃないのか？

女2 なんでも知ってるわけないだろう。

男2 なんでも知ってるっていったじゃないか。

女2 知らん。

男2 フツオは小学校に通っている。ヨシオは小学校で働いている。

女2 どうちがうんだ？

男2 フツオは小学校で授業を受けている。ヨシオはごみを燃やしたり、小学生に馬鹿にされたりして仕事している。用務員だ。

女2 おまえのことは分かった。フツオはなんだって？

男2 フツオはおれだよ。
女2 だからお前はなんだったって？
男2 フツオはだから小学生だ。
女2 小学生？
男2 そうだ。
女2 なんでそうなった？
男2 どうだっていいだろ。
女2 それで満足か？
男2 満足？
女2 人生に？
男2 一学期の成績には満足している。
女2 うん？
男2 ぜんぶ5だった。表彰状ももらった。
男1 まあ、大人だからな。
女2 お前は優秀だな、ヨシオ。わたしの思ったとおりだよ。
男2 フツオだよ。
女2 うん？
男2 フツオだよ、ヨシオはこいつだ。
女2 いい子に育ったなフツオ。わたしの思ったとおりだよ。
男2 ひるまないな、おばさん。
女2 お前寝ないのかい？

男2 なんて？
女2 そろそろ眠たいだろう？
男2 眠たくないよ。
女2 そうかい、おかしいねえ。ところでお前、島を出たいんだってな？
男1 え？おれ？
女2 そうさ。
男1 それはおれじゃない。こいつだよ。
女2 そんなはずはないだろう。
男2 そうだよ、こいつはそうじゃない。出たいのはおれだ。
女2 ところで姉さんの墓はどこにある？
男2 おい。
男1 今から行くのかい？
女2 今から行くわけないだろう。あした行くのさ。
男1 墓は、ここにある。
女2 ここ？
男1 そうだ。ちょうど、この下だ。
女2 この下？
男1 あれだ
女2 あ、ほんとだ。あれか。かまぼこの板を立ててるやつか？
男1 あれはワルオの墓だ。その隣の石。

女2 ああ、あれか。なぜ知らせないんだ？実の妹に。

男1 いや、知らなかったから。おばさんのこと。

女2 そうかい。あそこにあるなら、ちよつと手を合わせてくるよ。

男1 うん。

顔 (フツオがいったことはほんとうだ。橋はいつのまにか伸びて

きたのだ。最初に橋が見えた時、まだずっと向こうにあった。

それからすこしずつこちに近づいてきているように見えた。

伸びてきたのはほんとうに少しずつだった。みんな突然伸びて

きたようにいってたがそれはまちがいだ。おれはその橋が少し

ずつ伸びているのをずっと見ていた。ある日、橋は島に架って、

そのまま通り過ぎて行って、やがて四国まで届いたという話を

聞いた。だいぶ前の話だ。もしかしたら、今ごろはもう四国を

通り過ぎてさらにずっと向こうまで伸びていつているのかも

しれない。)

男1 あの、あいつ寝たよ。

女2 そうだろうね。

男1 そうだろうねって？

女2 あんなに食べてたからね、そりゃ寝るよ。

男1 え、これなんだい？

女2 フツオ。

男1 うん？

女2 ヨシオ。

男1 うん。

女2 掘り出し物があるんだよ。

男1 掘り出し物？

女2 そうさ、誰も手をつけてない、またとない花嫁だよ。

男1 ふうん。

女2 おまえにぴったりさ。どうだい？

男1 え？どうだいって？

女2 おまえはそのところどう考えている？

男1 なにが？

女1 花嫁だよ、おまえの花嫁だよ。当り前だろう？

男1 どうって？

女2 どうってことないだろう。どうなんだい？

男1 そうだな。いやあんまり。

女2 考えるんだよ。何で考えない？ほかに考えることなんてある

のかい？

男1 ああ。

女2 おまえいくつだい？四十だろ。

男1 うん、もうちよつとあれだけど。

女2 想像してごらんよフツオ、十七歳さ。

男1 十七歳？

女2 そうさ、十七歳なんだよ。でもただの十七歳じゃない。フツオ、おまえは花嫁に何を望む？おまえが花嫁に何を望もうともさ、それ以上だよ、それ以上の花嫁だよ。わたしが嘘をついたことがあるかい？

男1 うん。でもそもそもお婆さんのことよく知らないし。

女2 ないんだよ。わたしはね、嘘をついたことがないんだよ。少なくともお前にはね。これでもわたしはねフツオ、一流の相撲取りといっしょに食事したことだってあるんだよ。嘘なんかつくはずがないじゃないか。

男1 ああ、信じるよ。

女2 いいから想像してみな、十七歳さ。昼は奴隷のように働き、夜は奴隷のように尽くす花嫁だよ。しかも産むのは男ばかり、女なんか決して産まない。産むわけない。そういう家系なのさ。まだ花嫁の口は物を食う以外のことは何も知らない、でもお前が命令すれば何でも覚えるのさ。わかるだろ、特別な十七歳なんだよ。人前で平気でバナナを食べるような、そこらへんのはしたくない十七歳とは物がちがうんだよ。決して食べない。食べたことない。わかるだろフツオ。

男1 なにが？

女2 バナナさ。

男1 バナナは分かるけど。

女2 じゃあわかるだろ。これは一生ものの結婚になるよ。早く会いたいだろう？

男1 いやあ。

女2 なんだい、なにを迷うことなんかある。なにもないだろう？

男1 うんまあ。

女2 お前のための花嫁だよ。お前だけの花嫁さ。おまえの前じゃなきや、赤いものなんて決して身につけない、そうさお前がいなけりやただの真つ黒黒の女さ、それがお前の前じゃどうだい、見ちがえるような本物の花だよ。それがまだ十七歳なんだよ、フツオわかるだろ、お前のことだけが心配なんだよわたしは。

男1 ヨシオだよ。

女2 うん？

男1 おれはヨシオ。

女2 ヨシオ。答えを聞かせておくれよ。どうなんだい。わたしを安心させておくれよ。

男1 うん。

女2 どうしたのさ。それとももう誰かいるのかい？

男1 いや、それは。

女2 じゃあ、迷う理由がないじゃないか。わたしを喜ばせておくれよ。

男1 お婆さん喜ぶのかい。

女2 当たり前じゃないか、おまえの喜びはわたしの喜びさ。母さん

も喜ぶよ。答えを聞かせてくれ。さあ、フツオ。

男1 うん。

女2 うんじゃないんだよ。

男1 うん。

女2 掘り出し物なんだよ。これ以上ないおまえだけの花嫁だよ。

おまえの言葉だけを待ってるんだよ。女はなフツオ、わかるだ
ろ、女は誰かの嫁じゃなくちやいけな、誰かの叔母、誰かの
母じゃなくちやいけなんだ。そうじゃなかったら女の価値
はどこにある？女に生まれた意味なんてないんだよ。なあフツ
オ、さあその娘を助けてやるんだよ。おまえがうんといえは、
その娘は救われるんだ。さあ、するんだよフツオ。

男1 する？するってなにを？

女2 返事をしてやるんだよ。

男1 返事って。

女2 肝心なのは最初の夜さ。犬の首をはねるのさ。

男1 え？

女2 なんだっていいんだ、犬ならさ。女つてのは、いいかい？犬
に目がないのさ、だから目の前で男に逆らったらどうなるか一
番最初に教えてやるんだ。お前にはあのナイフがあるだろう？
お前はそれだけ持ってるやいい。あとは向こうが全部用意して

くれるんだからな。

男1 ナイフなんか持ってたかな？

女2 はい方がいい。わたしについてこの島を出るんだよ。今夜。

男1 この島？

女2 そうさ。

男1 ここは島なのか？

女2 なにを迷っている？こいつと別れるのがつらいのか？

男1 そういわけじゃないけど。

女2 この島を出たいんだろう？

男1 そうだったかな？

女2 そうだよ、おまえはこの島を出たかったんだよ。

男1 それはおれじゃないような気がする。

女2 ちがう。おまえだ。おまえはずっとこの島を出たかったんだ
よ。そういつてたじゃないか。もう覚えてないかもしれないけ

どね、おまえはずっとそう言ってたんだよ、フツオ。

男1 フツオ？

女2 思い出すんだよ。

男1 そんな名前だったかな？

女2 そうさ。おまえはそうだよ。忘れたのかい？

男1 なにをしたらいいんだったつけ、おれは？

女2 船を用意しておく。そこに来い。どこかわかるだろう？

男1 便所浜？

女2 そうさ。

男1 でもなんでおれなんだ？

女2 うん？

男1 こいつでもいいだろう。

女2 こいつはだめさ。

男1 なんで？

女2 こいつはうちの男じゃない。髪の毛を見りゃわかる。

男1 髪の毛？

女2 わかったな。

顔 (ラジオをつけてみた。まだ動くとは思わなかった。聞いたことのない曲が流れてきた。ラジオを犬のそばに置いたら静かに聞いているように見えた。もしかしたら聞いていなかったのかもしれないが、それはわからない。ひとまず文句はないようだった。鞆の中にあの男の帽子があったのを思い出して、それを横になっっている犬の頭に載せてみた。似あっていたとはいいたくない。つぎに服をひとつ着せてみた。大きかった。もうひとつ服を着せてみたら、それはそれほど大きくはなかった。わたしが買った服だった、ついにあの男はそれを着ることはなかったが。悪くなかった。ついにわたしが持っていたあの男の服をすべて犬に着させた。こんな男だったような気がしてきた。そん

なふうにして犬はあの男の歯ブラシも使うようになり、ご飯もいっしょに食べるようになった。ときどきはわたしたちは会話ができていないんじゃないかと思える時間もあった。わたしは犬に聞いてみた。)

女1 つづき教えてよ。

男3 つづき？

女1 わたし、あんたに水泳を教えてもらってたのよ。

男3 そうなの？

女1 そうなのよ、だからつづき教えてよ。平泳ぎと背泳ぎの動きをすっかり覚えたところまでいったところだったのよ。あとは海にいつてほんとうに泳げるかどうか、確かめるだけだったのよ。

男3 そうなのか。

女1 だからこんなところに来たのに。

男3 すまん。

女1 あんたがどっかいったから。

男3 すまん。

女1 ここに来ても、あんたいないし。

男3 すまん。

女1 ここにいると思ったのに。

男3 すまん。

女1 どこいったのよ。

男3 すまん。

女1 つづき教えてよ。

男3 うん。

顔 (泳ぐ?といつだったか私はいった。どういうわけでそんなことをいったのか、思い出せないのだけど、夏だったし、あの男が泳ぎに行きたいと言いつ出したのかもしれない。わたしは泳いだことがなかった。どうして泳がなければいけないのかもわからなかった。泳ぐってどうするの?息ができないじゃないの?ずっと止めとくなんて無理、息をしなければ死んでしまう。)

男3 泳いだことないのかい?

女1 死ぬじゃないの。

男3 死なないよ。息しながら泳ぐんだ。

女1 水の中で?

男3 水の中で息できるわけないだろう。顔を水面から出すんだよ。

おれが子供のころいた島じゃ、やることないから夏は泳いでばかりだった。

女1 学校で?

男3 海だよ。島にプールなんてない。

女1 そう。

顔 (そんな風にして、それから毎週水曜日、わたしはあの男の水

泳の授業を受けることになった。まず、洗面器に塩を入れた水

を張って顔をつけることから始めた。それが終わると部屋に寝そべって、平泳ぎの動きを教えてもらった、そして海で泳ぐには特に便利だという背泳ぎ。手を使うと疲れるので足だけで泳ぐようにと言われた。ほら、これだと息は吸い放題だ。ずっと顔は水面から出てるわけだから。わたしたちは、メトロノームを使つてリズムを取る方法を見つけた。もちろんそんなことをして実際に泳げるようになるとは思っていなかったし、あの男も思つてなかったんじゃないかと思う。肘や足に床ですりむいた傷が増えていった。でもわたしは恋をしていたのでそんなことはあまり気にならなかった。練習が終わった後、濡れてないわたしの体をあの男はタオルで丁寧に拭いてくれた。)

女1 水着を買おうと思うのだけど。

男3 水着?

女1 もう泳げるようになったし。

男3 まだじゃない?

女1 まだなの?

男3 まだだろう。

女1 動きはほとんど覚えたよ。

男3 泳ぎ方がわかっただけじゃ、まだ泳げるとはいえないよ。

女1 そんなことは泳いでみないとわからないじゃない。

男3 まあ、そうだけど。

女1 水着持つてる？

男3 持ってない。

女1 買いに行く？

男3 買いに行かない。

女1 なんで？

男3 もうそんな季節じゃない。

女1 まだ暑いよ。

男3 もう駄目なんだ。

女1 駄目ってなんで？

男3 くらげが出るんだ。だから駄目だ。

女1 くらげ？

男3 くらげ。

女1 なにそれ？

男3 海に浮かんでる、なんだろう、ふわっとした動物、生き物。

それが増えてくるんだよ。そしたらもう泳いだら駄目なんだ。

女1 なんで？

男3 怒られる。

女1 誰に？

男3 知らん。

女1 知らないの？

男3 知らない。

女1 なんで知らないの？

男3 知らないものは知らない。

女1 おい。

男3 うん？

女1 寝るな。

男3 うん。

女1 ずいぶん寝たる。いまは起きてる時間だよ。

男3 泳いだ後は眠たくなる。

女1 泳いだのは私じゃ。

男3 そうか。

女1 あんた泳いでないよ。

男3 そうだった。

女1 え？どこいくの？

男3 便所だよ。

女1 そんなふうにしてあの男はいなくなった。しかしこのいなくなつたということに気づくということは、意外にむずかしい。いるのかいないのかよくわからない男がいなくなつただから。

顔 (言われた通り、髪に油をつけて浜へ行った。おばさんはいなかった。おばさんはいなかったけど、小さい船が一つ繋いであ

ったので、それに乗って待つことにした。）

男2 もうこないな。

男1 うん。

男2 いいじゃないか。

男1 うん？

男2 その髪型。

男1 そうか。

男2 帰るか？あしたも学校あるし。

男1 あしたは学校ないぞ。

男2 え、なんでだ？

男1 台風が来てるから休みになったんだ。知らないのか？

男2 知らなかった。そうか。じゃあもうちよつと待つか。

男1 いや、もう帰ろう。この犬どうする？

男2 捨てりゃいい。あれ？

男1 うん。動き出したな、この船。

男2 行くのか？

男1 どうしよう？とりあえず行くか。

男2 どこにいくんだ？

男1 わからん。

男2 この犬どうする？

男1 とりあえず、もって行こう。首を刎ねなくちやいかんし。

男2 じゃあな。

男1 おいフツオ。

男2 なんだ？

男1 本返しておいてくれ。

男2 本？

男1 ナポレオンのやつ。

男2 だれに？

男1 図書室だよ。

男2 いやだよ。

顔（夢を見た。夢の中でわたしは海にはいって泳いでいた。教えてもらった通りの泳ぎ方をしているはずだと思っけれど、わたしは沈んでいく。メトロノームがないとリズムがわからない。リズムが間違っているせいだろう、わたしの体が海の底に向かって沈んでいくのがわかる。わたしは目をつむっている。目を開ける方法を教えてもらってなかったのだ。沈んでいくというのはこんな感じなのかと思う。自分の人生からどんどん離れていくように感じる。わたしの人生はたぶん海の上のくらげの浮いているあたりにあって、こんなところではない。とうとう海の底に着いたようだ。座ろうと思ったけど何処も濡れている。どうしたものだろうと思っ、思い切っって目を開けると、朝だった。まぶしかったせいもあっってそのまま、いろいろ乗り物を

乗りついでここに来た。船からいくつかの島が通り過ぎていくのを見ながら、いまのほうが夢の中にいるような気がした。部屋を貸してくれた親切な未亡人に、仕事がないと言ったら、自分は教師をやっているのだけどやめたいので代わりにやらないかと言われた。この人だ。ところで水着を売っているところはありますか、とわたしは聞いた。）

女2 水着？

女1 はい。

女2 泳ぐの？

女1 はい。

女2 夏にならないと売ってないと思うけど。いま泳ぐの？

女1 売ってないならいいです。

女2 いいの？

女1 はい。

女2 ひとり？

女1 え？

女2 ひとりで来たの？

女1 そうです。

女2 わたしもね、ひとりになったところなんですよ。

女1 あ、そうなんですか。

女2 先生するの初めて？

女1 はい。

女2 子供は全部で百人ぐらいしかいないし、みんな馬鹿だから心配ないよ。歌うたわしとけばいいだけだし。

女1 はあ。

女2 こんな楽な仕事ないよ。

女1 なんでやめるんですか？

女2 でていこうかなと思って。ここを。

女1 そうですか。

女2 どこがいいかな。東京？

女1 どうでしょうね。

女2 東京行ったことある？

女1 ありません。

女2 あそう。

女1 あの、萩本さんといううちは知ってますか？

女2 萩本なに？

女1 え？

女2 下の名前なに？

女1 下の名前？

女2 ここらはみんな萩本ですよ。

女1 え、そうなんですか？

女2 そうそう、みんな萩本。わたしも萩本。結婚する前も後も萩

本。だから萩本以外を見つけるほうがたいへんですよ。下の名前知らないの？

女1 あれ、なんだったかな？

女2 探しに来たの？男？

女1 いやそういうわけでもないんですけど。

女2 あね、結婚するなら金持ちがいいよ。

女1 え？

女2 本物の金持ち。でもここにはいませんよ。

女1 はあ。

女2 学校に若い用務員がいてね、貧乏だったんだけど宝くじに当たったんですよ。

女1 そうなんですか。

女2 そう。宝くじに当たったっていうから結婚してみたんだけど、これがどうにも。貧乏人が宝くじに当たったら、金持ちになると思う？これがならないんですよ。ただのくじに当たった貧乏人なのよ。ただのくじに当たった貧乏人っていうのはただの貧乏より駄目なんですよ。金があったのはあつという間なんですよ。

女1 じゃあ、いまは？

女2 さあ。

女1 え、知らないんですか？

女2 そうそう。どっか逃げていった。この机、ルイヴィトン。そ

のときの名残。きゅうり食べる？

女1 あ、すいません。

男2 お手。

男3 (お手をする)

男2 お座り。

男3 (お座りをする)

男2 鉛筆。

男3 (鉛筆を削る)

男1 結局、乗った船が台風で転覆し、わたしは死んでしまった。フツオはばああの隣に墓をつくって、犬がくわえて帰ってきたわたしの髪とナポレオンの本をそこに埋めた。そのとき、奥の方にもうひとつ墓を見つけた。古いかまぼこの板にアイコ十七歳と書いてあった。赤い髪飾りが埋まっていた。部屋は余ったままだったので、フツオはそのまま犬を飼うことにした。

男2 パンチ&チョップ。

男3 (パンチ&チョップする)

男2 うれしくねえよ。

女2 あのみ。

顔 (ときゅうりを食べながら、女は突然いった。)

女2 住むところ変えたら、ついでに名前変えるといいついていうじ

やない。

女1 知りません。
女2 え？
女1 聞いたことないですよ、そんな話。
女2 そうなの？
女1 はい。
女2 ほんと？
女1 名前変えるってできるんですか、そんな簡単に。
女2 え、できるんじゃないの？ちがうの？
女1 聞いたことないですけど。
女2 そうなの？名前変えたことある？
女1 ありません。
女2 そうか。ちょっと楽しみだったのに。
女1 考えてたんですか？
女2 うん。豊臣とかどうかねえ。
女1 豊臣。いいですね。
女2 ほんと？
女1 嘘です。よくありませんでした。すいません。
女2 駄目か、なんかいいの？
女1 名前？
女2 うん。
女1 鈴木。

女2 鈴木？
女1 東京っぽい。
女2 おお。鈴木なに？
女1 えっとね。
男1 (そんなふうにしてその日は長い間、新しい名前を考えていた。どのようなやりとりがあったのかしらないけど、結局、宮下桃子になった。ずいぶん気に入っていたので、マンガから頂戴しましたとは言えずじまいだった。宮下桃子はそのあとしばらくして、どっかに去っていった。そのころはまだ私も生きていた。私の母も寝たきりだったが、まだぎりぎり生きていた。いつ食べたときのものかわからないごはん粒が、母の半開きになったままの口元にずっとついていて、それはもう母の一部と呼んでもよいものになっていた。)

引用・参考文献

『僕たちはしなかった』(スチュアート・ダイベック／柴田元幸訳)
『猫の首を刎ねる』(ガーダ・アルサマン／岡真里訳)

上演記録

●初演

壁ノ花団第七回公演

「ニューヘアスタイルズグッド」

2012年9月13日～16日 於 元・立誠小学校 講堂

▼キャスト

男1 F. ジャパン

男2 金替康博

男3 古藤望

女1 森井めぐみ

女2 内田淳子

▼スタッフ

演出 水沼健

舞台美術 西田聖

照明 吉本有輝子

音響 堂岡俊弘

衣裳 大野知英

演出助手 F.O.ペレイラ宏一郎

舞台監督 浜村修司

制作 垣脇純子 本郷麻衣 小山佳織

●再演

壁ノ花団

「ニューヘアスタイルズグッド」

2018年10月19日～20日 於 近畿大学 11月ホール

2018年11月2日～4日 於 すみだパークスタジオ倉

▼キャスト

男1 F. ジャパン

男2 金替康博

男3 杉原公輔

女1 松原由希子

女2 内田淳子

▼スタッフ

演出 水沼健

照明 吉本有輝子(真昼)

音響 堂岡俊弘

衣裳 大野知英

演出補佐 前島あかね

舞台監督 浜村修司

制作 垣脇純子 谷口静栄

©2018 by Takeshi Mizunuma

禁無断複写、転載。

有限会社キューカンバー

〒605-0942 京都市東山区蒔田町 549-3 藤ビル 2F

Tel | 075-525-2195 Fax | 075-525-2197

E-mail | info@cucumber-m.com URL | http://cucumber-m.com